

民主化とガバナンス

岩 崎 正 洋

1 民主化の成否とガバナンス

本稿では、民主化の成否について考えるために、民主化とガバナンスとの関係に目を向ける。とりわけ、民主主義の定着段階とガバナンスとのかかわりに焦点を絞ることにする。本稿は、「民主化が成功するには、民主的にガバナンスが効いているか否かが鍵となり、民主化の失敗には、かりにガバナンスが機能していたとしても、民主的にはガバナンスが機能しておらず、非民主的な統治がなされる可能性^①がある」ことを考えるのを目的としている。

一連の民主化過程において、体制移行後に民主主義が定着するのは、当該の国家ないし政治体制において、ガバナンスが機能しているか否かが一つの鍵となるのではないかと思われる。体制移行により、新しい体制が誕生することで、民主主義のゲームのルールが採用され、さまざまなアクターがゲームに参加し、新しい体制におけるゲームが繰

り広げられる。⁽²⁾

かつて、リンス (Juan J. Linz) とステパン (Alfred Stepan) は、民主主義が「街で唯一のゲームのルール」となった政治状況が民主主義の定着であると指摘した。⁽³⁾ 彼らの議論は、南欧と東欧、さらに旧ソ連を主たる対象としており、他の地域の動向には触れていない。彼らの議論が刊行されたのは、一九九六年であり、同書で扱われている事例がその後民主主義の定着を経験したのか否か、定着して存続しているのか否か、あるいは他の事例がどうなっているかについて、今だからこそ検討できる点もある。

一九七〇年代半ばから一九九〇年代にかけて、世界各地でみられた民主化のさまざまな事例は、既存の権威主義体制から民主主義的政治体制への体制移行を示すものであった。移行に成功した場合は、その後、民主主義の定着に向けた過程を歩むことになったが、定着に至らなかったり、移行に失敗したりした事例もみられた。

民主化の現実をふまえて、リンスとステパンの議論をみると、民主主義が定着するには、ガバナンスの実現がともなうことが示唆されているように思われる。民主化の段階や民主主義の定着の度合いを測る基準と、ガバナンスの実現やガバナンスが機能している程度を把握するための基準とが重なりをもつことになったとしても不思議はない。そうだとすれば、民主主義とガバナンスが多分に重なりをもつものとして捉えることができる。

そこで、以下の議論では、民主主義の定着は、ガバナンスが効いているか否かによって成功したり、失敗したりするのではないかという点を考えていくこととする。

2 民主化の成功と失敗

民主化の成功と失敗を分けることになるのは何であろうか。⁽⁴⁾たとえば、ひとたび民主化に向けた流れが生じると、そのまま一気に体制移行が起こり、民主主義的な政治体制が誕生する場合がある。逆に、いったんは民主化に向けた動きがみられたにもかかわらず、頓挫してしまう場合もある。また、ある時点までは民主化が急速に進むようにみえたとしても、民主主義的な体制移行が実現せず、民主化しない場合もある。

あらゆる国家が民主化に成功するとは限らない。かりに、民主化の過程において、体制移行が実現したとしても、民主主義が定着するとも限らない。民主化の成功や失敗に注目しても、どの時点に注目するかによって、ある国を成功事例として取り扱うこともできるし、失敗事例として取り扱わざるを得ない場合もある。

たとえば、「民主化の第三の波」⁽⁵⁾という概念が喧伝されていた一九九〇年代には、民主化の成功事例として位置づけられていたとしても、二〇〇〇年代に入ってから、成功事例というよりはむしろ失敗事例として扱われるようになった事例も存在する。ここでは紙幅の都合上、詳しい説明は割愛するが、表1は、民主化における段階の区分と、段階ごとにどのようなアクターが関与しているかを考えるための枠組みを提示している。表1に示されているような点に注目することは、民主化の成否に関して各国の事例を考える際に役立つと思われる。⁽⁶⁾

ある国では民主化に成功し、他のある国では民主化に失敗するとしたら、単純に分けると、「民主化に成功した国」「民主主義」と「民主化に失敗した国」「非民主主義」とに世界の国々を大別できる。さらに、民主化そのものに取り組まない国の存在を考慮すると、「民主化に失敗した国もしくは民主化に取り組まない国」「非民主主義」となる。

表1 民主化の段階とアクターの類型

民主化の段階		アクター					
		支配者	軍部	政党	反体制派	外部	その他
体制移行	権威主義体制の正統性の低下						
	権威主義体制の崩壊						
	第一回目の自由選挙						
民主主義の定着	第二回目以降の自由選挙						
	定着						

もちろん、世界の民主主義諸国が一様でないことは明らかである。⁽⁷⁾ 非民主主義国が政治体制の違いという点から「全体主義」や「権威主義」に類型化され、さらに、「ポスト全体主義体制」や「スルタン主義体制」などに細分化されるのは、⁽⁸⁾ 民主化の成功と失敗に関する事例が数多く存在し、それらをいかに整理するかという作業も欠かせなくなっているからである。⁽⁹⁾ たとえば、フィッシュ (M. Steven Fish) とヴィッテンバーグ (Jason Wittenberg) は、民主化に関連して国家の類型を行ったが、⁽¹⁰⁾ 彼らは、「確立した民主主義」、「確立した専制」、「しつかりした民主化」、「弱い民主化」、「失敗した民主化」というように、五つのタイプに国家を分けている。⁽¹¹⁾ 「確立した民主主義」と「確立した専制」は、民主主義と非民主主義とに大別した際の両極に位置するものとして捉えることができるが、他の三つは、民主化の成否を反映したものであり、両極の中間に位置づけられる。民主主義の最も近くに位置するのが「しつかりした民主化」であり、最も非民主主義に近いのが「失敗した民主化」であり、「弱い民主化」は他の二つの民主化の間に位置づけられる。

五つのタイプをみるだけで疑問に思うのは、なぜ民主化の過程は異なる結果をもたらすのかという点である。いいかえると、民主化の成否を分け

るのは何かということである。民主化に失敗しなくても、「しっかりした民主化」と「弱い民主化」という二つのタイプがあり、非民主主義についても、「失敗した民主化」と「確立した専制」との二つのタイプがある。両者は、非民主主義であるということでは変わりがないが、民主化しようとしたが失敗したという点と、民主化そのものには取り組まなかったという点において異なっている。

なぜ民主化は、さまざまな結果をもたらすのであろうか。民主化が成功する場合であっても、すべての事例が一つのパターンに沿って進展するのではなく、いくつかのパターンに分かれるのは明らかである。¹² 民主化を引き起こす社会経済的要因が何かによって、民主化をいくつかのパターン化することができし、民主化の中心的なアクターが何かによってもパターン化は可能である。さらに、民主化に際し、どのような政治制度が採用されるのかという点も、民主化のパターンを考える際に、無視することはできない。

民主化以前に大統領制を採用していた場合は、権威主義的大統領制から民主主義的大統領制へ移行するのか、それとも議院内閣制を採用するのかにより、異なる結果をもたらすことになる。¹³ 同様に、選挙制度も、小選挙区制を採用するのか、それとも比例代表制を採用するのかにより、異なってくる。¹⁴ 民主化に際し、どのような制度を導入するのかは、どのような民主主義をもたらすのかという問題につながる。¹⁵

表2は、縦軸において、民主化そのものが成功するか失敗するかを分けており、横軸においては、民主化に影響を及ぼす要因を挙げている。民主化が成功する場合のパターンは、さらにいくつかに分けられるし、失敗する場合もいくつかに分けられる。ここでは、民主化に影響を及ぼす要因についても、社会経済的要因、アクター、政治制度という三つしか挙げていない。表2は、暫定的な覚書としてまとめたものであり、今後の修正が必要となる。

表2 民主化のパターンと要因

		社会経済的要因	アクター	政治制度
民主化の成否	成功			
	失敗			

もちろん、民主化のパターンに影響を及ぼす要因については、さらに挙げていくことができるとしても、ここでの目的は、民主化のパターンの類型化ではない。そのため、民主化には成功と失敗があるとしても、成功のパターンはいくつかあるし、失敗のパターンもいくつかあるという点を指摘するに留める⁽¹⁶⁾。

3 民主主義の定着とガバナンス

民主主義の定着には、民主的なガバナンスが効いているか否かが重要であるという点を考えるためには、まず、民主主義とは何かを明らかにする必要がある。それでは、民主主義とは何か。

民主化に関する議論においては、長らくシュンペーター (Joseph A. Schumpeter) に代表されるような民主主義の定義が採用されてきた⁽¹⁷⁾。シュンペーターによる民主主義の定義は、選挙における競争性を重視しており、競争的エリート民主主義モデルとも表現される⁽¹⁸⁾。

現代において、民主主義であるか否かを分けるのは、競争的な選挙の有無であり、民主化により体制移行が実現するのは、競争的な選挙の実施とかかわりをもつことになる。そのため、体制移行においては、競争的選挙が実施され、非民主主義的な体制から民主

主義的な体制への政権交代が実現する。既存の権威主義体制の崩壊後、第一回目の選挙が行われた結果として、新しい政権が選出されることで、ようやく民主主義的政治体制の誕生となる。

民主化の第三の波が世界を席卷した後、しばらくの間、競合的エリート民主主義モデルは、いかに民主主義を捉えるのかという問いかけに対して説得力をもっていた。しかし、民主化の進展には、競合的な選挙の実施だけで事足りるのではないという現実が徐々に顕在化したことにより、シュンペーター流に民主主義を理解する立場は批判を浴びるようになった。¹⁹

体制移行の判別を行うのであれば、民主主義を最小限に定義づけることだけで対応可能であろうし、その場合には、シュンペーター流の定義が有用であるかもしれない。しかし、体制移行後に民主主義が定着するか否かを判断するには、最小限度の定義では狭義の意味しか含んでいないため、不十分な内容となり、適切さを欠くという批判を受けることになる。いまや民主化の第三の波をめぐる議論から一定の時間が経過しており、競合的エリート民主主義モデルによって民主主義の定着について理解しようとするのが適切ではないという点は、広く認識されているように思われる。

体制移行後は、民主主義が定着する場合としない場合とに分けて考える必要がある。まず、定着する場合は、競合的な選挙が繰り返し実施され、民意を反映して、新しい政権が選出され、国内のさまざまな領域において、民主主義が根づいている状態を意味する。

逆に、体制移行後に民主主義が定着しない場合とは、体制移行が実現して競合的な選挙が実施されたとしても、民主主義の実現へと至らず、非自由主義的民主主義 (illiberal democracy) となる場合や、選挙結果を受けて、一党支配

が強化されたり、一人の政治家による強権的な政治手法がみられるようになったりする場合を意味する。たとえば、競合的選挙であるにもかかわらず、マスメディアへの抑圧や情報の統制が行われたり、野党をはじめ、政府に批判的な集団に対する圧力が顕著に行われたりするならば、民主主義が定着しているとはいえない。⁽²⁰⁾

選挙の結果、民主主義的政治体制が実現せず、必ずしも純粹に「民主主義」的ではないような、非民主主義的政治体制が誕生することがある。その場合には、混合体制 (hybrid regime) と表現される。⁽²¹⁾ さらに、競合的権威主義 (competitive authoritarianism) の概念は、レヴィツキー (Steven Levitsky) とウェイ (Lucan A. Way) によつて提示されたが、権威主義体制に関する議論に広がりをもたせることになっただけでなく、混合体制のバリエーションについて議論する機会をもたらした。⁽²²⁾

リンスとステパンは、行動、態度、制度という三つの次元を挙げながら、民主主義が街で唯一のゲームとなった政治状況を意味するものとして、定着した民主主義を説明している。⁽²³⁾ 彼らは、定着を持続するには、市民社会、政治社会、法の支配、国家官僚制、経済社会という相互に関連し補強しあう五つの領域の存在が必要であるという。⁽²⁴⁾

市民社会とは、政体の次のような領域のことである。すなわち、国家から相対的に自律している自己組織集団、運動、個人などが価値を表出し、結社をつくり団結し、自らの利益を推進しようとしている、政体の領域のことである。⁽²⁵⁾ 市民社会には、女性団体や近隣組織、宗教団体、知識人集団などのさまざまな社会運動をはじめ、労働組合、企業家集団、ジャーナリスト、法律家などのあらゆる社会階層の市民的結社が含まれている。さらに、市民社会には、いかなる組織にも所属していない普通の市民も含まれる。

多数の普通の市民が果たす役割は、決して小さなものではなく、民主化の成否を左右することがある。⁽²⁶⁾ 既存の権威

主義体制が正統性を低下させるのは、多くの普通の市民からの支持を喪失することであり、最初は一部の小集団が政府批判や反政府活動を行う程度であったとしても、やがては体制崩壊につながるほどの大規模な民主化要求にまで拡大することがある。その結果として、権威主義体制の正統性は失われ、体制が崩壊し、新たな民主主義体制の誕生へと至る体制移行が実現する。

しかしながら、市民社会だけで民主化が完結するのではない。民主化においては、市民社会と政治社会との相互補完的な特徴を欠かすことはできない。政治社会は、とりわけ、政党、選挙、選挙法、政治的リーダーシップ、政党間の同盟、議会などの制度を含んでいる。民主主義的な政治体制がつくられるためには、市民社会だけでなく、政治社会も必要不可欠な存在である。

政治社会とは、政体が次のようなことを行う領域である。具体的には、政体が、公権力や国家機関に対する統制を行う正統性のある権利をめぐって相対立することを明確にする領域である。²⁷

リンスとステパンは、民主化の各段階における市民社会と政治社会との関係にも言及しているが、彼らによれば、あらゆる段階において、市民社会が重要な役割を果たすという。しかし、市民社会と政治社会とが常に均衡した関係にあるとは限らず、両者の関係が均衡を崩したときには、民主化の進展に影響が及ぶ可能性がある。両者が常に均衡関係を維持し続けると考えるのは現実的ではない。

たとえば、市民社会の指導者の多くは、民主派勢力内で起こる内部対立や分裂を道徳的に嫌うし、政治における制度の慣例化、仲介、妥協を侮辱的に語るが、これらはいずれも定着した民主主義における政治社会にとつては不可避免的な現実である。²⁸ 民主主義の定着には、政党の存在が必要となるが、まさに政党は、民主派勢力内部の違いを集約し

たり代表したりするし、民主的な紛争調停の規範と手続きを習熟する必要がある。制度の慣習化の程度を高めることが重要になる。国家と市民社会との間の媒介や、妥協を成立させることは、政治社会においては正統性があり、必要な仕事である。

したがって、民主主義の定着には、市民社会と政治社会との相互補完性を欠くことができないという点が、これまでの議論から明らかになる。リンスとステパンは、市民社会と政治社会の十分な自律性と独立性が法の支配に組み込まれ、法の支配によつて支えられなければならないという⁽²⁹⁾。彼らによれば、活発で独立した市民社会、十分に自律的な政治社会とガバナンスの手続きについての実効的な合意、立憲主義と法の支配という三つの条件は、定着した民主主義の前提条件であり、官僚制が民主的な指導者によつて利用可能であり、制度化された経済社会が存在する場合には、上記の三つの条件が満たされやすくなるとされる。

リンスとステパンによれば、民主主義は、国家のガバナンスの一つの形態であり、現代の民主主義体制は、国家の存在なしに定着することはない⁽³⁰⁾。彼らが用いている「ガバナンス」という概念は、前後の文脈から考えると、統治という意味合いとして使われているように思われる。彼らのいう統治とは、国家ないし政府が唯一絶対的な至高の地位を占めて、独占的に権力を行使するようなものではなく、ガバナンス論で表現されるような「共治」や「協治」などの意味合いをもつと考えられる。

その理由を簡単に説明するために、以下では、前者をガバメント論における統治、後者をガバナンス論における統治と表現する⁽³¹⁾。両者の大きな相違点は、前者が垂直的な統治であるのに対し、後者が水平的な統治であるという点である⁽³²⁾。

ガバメント論における統治は、中心的なアクターが国家ないし政府であり、他のアクターに比べて国家や政府が圧倒的に優越的な地位にあり、トップダウン式に権力を行使する。この点は、民主主義であろうとなかろうと、共通している特徴である。その意味で、民主主義の場合は、選挙を通じて民主主義的な正統性が賦与されていることが重要視されるが、非民主主義の場合は、統治を行うアクターごとに正統性の根拠が異なり、そもそも正統性の基盤が強固なものであるか否かが議論を分ける。

ガバナンス論における統治は、国家ないし政府が独占的に中心的アクターとなるのではなく、他のさまざまなアクターとともに、権力を行使するのであり、ボトムアップ式に権力を行使する可能性すら否定するものではない。ガバナンス論においては、多様なアクターの存在が前提となっており、さまざまなアクターの統治への関与は一定程度の正統性をもつものとして捉えられている。

さらに、両者を分けるのは、リンスとステパンが挙げた相互に関連する五つの領域の存在である。ガバメント論における統治は、何よりも政治社会の存在が重視され、政治社会に関連して、法の支配や国家官僚制の存在が意識される。そこでなされる統治は、あくまで公式的な制度に則ったものであり、公私領域の区分からすれば、公的領域のみに位置するものである。

しかし、ガバナンス論における統治は、五つの領域すべてが相互に関連し、政治社会、法の支配、国家官僚制に加えて、市民社会と経済社会も重要な存在として扱われる。ガバナンス論が従来の公私領域には収まりきらなくなった現象や論点を取り扱っていることから明らかのように、ガバナンス論における統治は、従来型の統治とは異なっており、たとえば、政治社会だけでなく、市民社会の役割が大きなものとなっている。

このように考えてくると、リンスとステパンのいうガバナンスとは、統治を意味しているとしても、従来型の統治という意味ではなく、より広範な意味を内包した統治であると理解することができる。それだからこそ、彼らの議論は、民主化とガバナンスを考える手掛かりにもなるのである。

彼らの議論では、相互に関連した五つの領域が重視され、最初の三つが民主主義の定着の前提条件とされているが、とりわけ、市民社会と政治社会の二つが民主化とガバナンスとのかかわりを考えるのに役立つ領域であることは、これまで述べてきたことから理解することができよう。

4 民主的ガバナンスと権威主義的ガバナンス

定着した民主主義においては、政治社会と市民社会の両方が相互補完的な関係にあるからこそ、民主的ガバナンスがみられると考えられる。この場合は、政治社会も市民社会もそれぞれが独自に機能するのではなく、有機的な関係にあり、その結果として、民主的なガバナンスが実現する。

それに対して、民主主義が定着しない場合は、政治社会と市民社会が相互補完的な関係になかったり、それぞれが機能していなかったり、いずれか一方が機能していなかったりするため、そもそも民主主義的ではなく、そこでみられる統治も民主的ガバナンスとはいえず、非民主主義的なものとなる。

市民社会が民主的ガバナンスの実現において重要な役割を果たしていることを考えると、市民社会が機能していない場合は、非民主主義的なガバナンスといえる。あるいは、既存の権威主義体制からの体制移行後であっても民主主

表3 政治社会と市民社会との関係

		市民社会	
		機能的	機能せず
政治社会	機能的	民主的ガバナンス	非民主的ガバナンス
	機能せず	無秩序	政体の崩壊

義が定着せず、権威主義体制のときからの統治の残滓がみられるとすれば、非民主的ガバナンスというよりは、権威主義的ガバナンスと表現することが適切であるかもしれない。

権威主義体制であれ、民主主義体制であれ、政治社会と市民社会が機能しているか否かはガバナンスにも影響を及ぼすという点を示したものが、表3である。とりわけ、政治社会と市民社会のそれぞれが機能しているか否かを判断する軸を縦軸と横軸に設けている。縦軸は、政治社会が機能しているか否かを示し、横軸は、市民社会が機能しているか否かを示している。

表3は、四つの組み合わせを提出している。まず挙げることができるのは、政治社会が機能しており、市民社会も機能しているという組み合わせである。この場合は、二つの領域が機能していることから、民主的ガバナンスが実現すると考えられる。

次に、政治社会が機能しており、市民社会が機能していないという組み合わせは、民主主義が定着していない段階にあり、ガバナンスがみられたとしても、民主主義的なものではない。そのため、非民主的ガバナンスないし権威主義的ガバナンスがみられることになる。

第三に、政治社会は機能していないが、市民社会が機能しているという組み合わせは、正統性をもつ統治の担い手が存在しない状況であり、多様な集団がそれぞれ行動していたとしても、一つの国家ないし体制としてのまとまりに欠ける。このような状況においては、さまざまな政治制度が役割を果たしておらず、統治における中心的な核が存在しないため、

無秩序状態となってしまう。

第四に、政治社会も市民社会も機能していないという組み合わせは、政体そのものの秩序はなく、ガバナンスが効いているとはいえない状況となる。この場合は、政体そのものの崩壊を意味する。

四つの組み合わせは、政治社会と市民社会の関係を単純に分けた場合に導き出されたものであり、それぞれの組み合わせについて、具体例として挙げる事ができる事例もあれば、必ずしもいずれか一つにのみ該当するとは断定できない事例もあり得る。そのため、具体的な事例の検討を通して、民主化とガバナンスとのかわりは、より明確になつてくると思われる。

ここで挙げた民主的ガバナンスと、非民主的ガバナンスないし権威主義的ガバナンスという区分は、政治体制の区分とも重なり合う。民主主義的政治体制においては、民主的ガバナンスがみられるのに対し、権威主義体制においては、権威主義的ガバナンスがみられると考えられる。政治体制の類型に関して、ここでさらに詳しく述べる余裕はないが、政治体制において、どのようにガバナンスが機能するかを検討することは、さまざまな政治体制の特徴を明らかにするのに役立つように思われる。

本稿においては、民主化とガバナンスとのかわりについて、大まかな見取り図を提示したに過ぎない。そのため、本稿で言及したにもかかわらず、掘り下げて取り扱うことができなかつた点や、本稿からさらに導き出すことができる点は、今後の課題として残されたままである。

最後に、残された課題として、以下の三点を指摘しておく。

第一に、政治体制の違いがガバナンスを特徴づけるのか否かという点を論じる必要がある。定着した民主主義にお

いて民主的ガバナンスが機能するという点は、政治体制とガバナンスとのかかわりを明示的に示しているが、異なる政治体制における統治の態様をガバナンスという点から比較することにより、民主主義的政治体制における民主的ガバナンスと権威主義体制における非民主的ガバナンスとの比較分析が可能になる。それにより、民主主義とガバナンスとの関係が明らかになるし、ガバナンス概念の普遍性についても検討を加えることができる。

第二に、体制移行の段階から民主主義の定着段階に至るまでに、政治社会と市民社会の関係がどのように変化するかという点である。体制移行の段階では、市民社会の担い手たる多様なアクターが民主化勢力として一つにまとまり、既存の権威主義体制の崩壊をもたらす。しかし、民主主義定着の段階では、いつまでも民主化勢力が一枚岩でまとまり続けることはなく、いくつかの異なる勢力に分かれ、相対立する勢力となり、政治社会において対立を繰り返すようになる。具体的には、民主化後の政党システムの形成過程に注目することで、一連の過程を観察することができる。

第三に、本稿では、民主化とガバナンスとのかかわりについて述べたとはいえ、具体的な事例にもとづいて検討を行ってきたわけではない。最近の民主化研究の動向をみると、ポリティィV、フリーダムハウス、世界ガバナンス指標などのデータを用いた研究成果が増えている。さまざまなデータが蓄積されてきたことにより、従来よりも多国間の比較が容易になったといえる。その意味では、本稿で論じた論点をいかにデータにもとづき、実証的に分析していくのかという点も今後に残された課題であるといえよう。

(1) 岩崎正洋「民主化の成功と失敗」秋山和宏・岩崎正洋編『国家をめぐるガバナンス論の現在』勁草書房、二〇一二年、

一五六頁。

- (2) Guillermo O'Donnell and Philippe C. Schmitter, *Transitions from Authoritarian Rule: Tentative Conclusions about Uncertain Democracies*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1986 (真柄秀子・井戸正伸訳 (一九八六) 『民主化の比較政治学——権威主義支配以後の政治世界』未来社); Georg Sørensen, *Democracy and Democratization: Processes and Prospects in a Changing World*, 3rd ed., Boulder: Westview Press, 2008.
- (3) Juan J. Linz and Alfred Stepan, *Problems of Democratic Transition and Consolidation: Southern Europe, South America, and Post-Communist Europe*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1996, p. 5 (荒井祐介・五十嵐誠一・上田太郎訳『民主化の理論——民主主義への移行と定着の課題』一藝社、二〇〇五年、一四頁)。
- (4) この点に関しては、たとえば、以下を参照されたい。岩崎、前掲論文、一五五―一七七頁。
- (5) Samuel P. Huntington, *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century*, Norman: University of Oklahoma Press, 1991 (坪郷實・中道寿一・藪野祐三訳『第三の波——二〇世紀後半の民主化』三嶺書房、一九九五年)。
- (6) 岩崎、前掲論文、一六五―一七〇頁。
- (7) Arend Lijphart, *Democracies: Patterns of Majoritarian and Consensus Government in Twenty-One Countries*, New Haven: Yale University Press, 1984; Arend Lijphart, *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*, New Haven: Yale University Press, 1999 (粕谷祐子訳『民主主義対民主主義——多数決型とコンセンサス型の三六ヶ国比較研究』勁草書房、二〇〇五年)。
- (8) Linz and Stepan, *op. cit.*
- (9) *Ibid.*
- (10) M. Steven Fish and Jason Wittenberg, 'Failed Democratization,' in Christian W. Haerpfer, Patrick Bernhagen, Ronald F. Inglehart and Christian Welzel (eds.), *Democratization*, Oxford: Oxford University Press, 2009, pp. 249-265.
- (11) 紙幅の都合上、ここでは、各タイプにどのような国家が該当するかについての検討は行わない。同論文では、いくつかの

具体的な国名に言及がなされている。 *Ibid.*, pp. 250-252.

- (12) 岩崎正洋『政治発展と民主化の比較政治学』東海大学出版会、二〇〇六年。
- (13) Alfred Stepan, 'Introduction: Undertheorized Political Problems in the Founding Democratization Literature,' in Alfred Stepan (ed.), *Democracies in Danger*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2009, pp. 1-14.
- (14) Larry Diamond and Marc F. Plattner (eds.), *Electoral Systems and Democracy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2006.
- (15) Larry Diamond, *The Spirit of Democracy: The Struggle to Build Free Societies throughout the World*, New York: Times Books, 2008.
- (16) 民主化のパターンを考える際に、たとえば、「アラブの春」に関連して、ICT (Information and Communications Technology) の果たした役割に注目した議論が散見される。さしあたり、以下を参照。Larry Diamond, 'Introduction,' in Larry Diamond and Marc F. Plattner (eds.), *Liberation Technology: Social Media and the Struggle for Democracy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2012, pp. ix-xxviii; Larry Diamond, 'Liberation Technology,' *Ibid.*, pp. 3-17.
- (17) このような立場の代表的な議論としては、たとえば、以下を参照されたい。Joseph A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism, and Democracy*, New York: Harper and Row, 1942 (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社、一九六二年); Huntington, *op. cit.*
- (18) David Held, *Models of Democracy*, 3rd ed., Cambridge: Polity Press, 2006.
- (19) この点に関連して、民主化と選挙に関しては、併せて以下も参照されたい。吉川洋子編『民主化過程の選挙——地域研究から見た政党・候補者・有権者』行路社、二〇一〇年。
- (20) たとえば、フリーダムハウスの年次報告により「自由」とされず、「部分的に自由」であるとか、「自由ではない」とされる場合も、民主主義が定着したとはいえない。フリーダムハウスに関しては、たとえば、以下を参照。Arch Puddington, 'The Year of the Arab Uprisings,' *Journal of Democracy*, Vol. 23, No. 2, 2012, pp. 74-88.

- (21) Larry Diamond, *Developing Democracy: Toward Consolidation*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1999; Henry E. Hale, 'Hybrid Regimes: When Democracy and Autocracy Mix,' in Nathan J. Brown (ed.), *The Dynamics of Democratization: Dictatorship, Development, and Diffusion*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2011, pp. 23-45.
- (22) Steven Levitsky and Lucan A. Way, *Competitive Authoritarianism: Hybrid Regimes After the Cold War*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010.
- (23) Linz and Stepan, *op. cit.*, p. 5.
- (24) *Ibid.*, p. 7.
- (25) *Ibid.*, p. 7.
- (26) *Ibid.*, pp. 7-8.
- (27) *Ibid.*, p. 8.
- (28) *Ibid.*, pp. 9-10.
- (29) *Ibid.*, p. 10.
- (30) *Ibid.*, p. 7.
- (31) この点に関連して、併せて以下も参照されたい。岩崎正洋編『ガバナンス論の現在——国家をめぐる公共性と民主主義』勁草書房、二〇一一年。岩崎正洋「なぜガバナンスについて論じるのか——政治学の立場から」秋山・岩崎編、前掲書、三一―一八頁。
- (32) Arthur Benz and Yannis Papadopoulos (eds.), *Governance and Democracy: Comparing national, European and international experience*, London: Routledge, 2006.

参考文献

〈洋書〉

- Baklini, Abdo and Helen Desfosses (eds.) (1997) *Designs for Democratic Stability: Studies in Viable Constitutionalism*, New York: M. E. Sharpe.
- Baloyra, Enrique A. (ed.) (1987) *Comparing New Democracies*, Boulder: Westview Press.
- Benz, Arthur, and Yannis Papadopoulos (eds.) (2006) *Governance and Democracy: Comparing national, European and international experience*, London: Routledge.
- Bevir, Mark (ed.) (2007) *Public Governance*, Vol. 1, London: Sage.
- Bevir, Mark (2009) *Key Concepts in Governance*, London: Sage.
- Bevir, Mark (2010) *Democratic Governance*, Princeton: Princeton University Press.
- Burnell, Peter and Richard Youngs (2010) *New Challenges to Democratization*, New York: Routledge.
- Carothers, Thomas (1999) *Aiding Democracy Abroad: The Learning Curve*, Washington, D. C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- Carothers, Thomas (2006) *Confronting the Weakest Link: Aiding Political Parties in New Democracies*, Washington, D. C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- Crozier, Michel, Samuel P. Huntington and Joji Watanuki (1975) *The Crisis of Democracy: Report on the Governability of Democracies to the Trilateral Commission*, New York: New York University Press (日米欧委員会編・綿貫讓治監訳 (一九七五) 『民主主義の統治能力——日本・アメリカ・西欧——その危機の検討』サイマル出版会).
- Dahl, Robert A. (1981) *Pluralism: Participation and Opposition*, New Haven: Yale University Press (高島通敏・前田脩訳 (一九八一) 『ポリアーキー』三二書房).
- Diamond, Larry (1999) *Developing Democracy: Toward Consolidation*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.

- Diamond, Larry (2008) *The Spirit of Democracy: The Struggle to Build Free Societies throughout the World*, New York: Times Books.
- Diamond, Larry (2012) 'Introduction,' in Larry Diamond and Marc F. Plattner (eds.), *Liberation Technology: Social Media and the Struggle for Democracy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. ix-xxvii.
- Diamond, Larry (2012) 'Liberation Technology,' in Larry Diamond and Marc F. Plattner (eds.), *Liberation Technology: Social Media and the Struggle for Democracy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 3-17.
- Diamond, Larry and Marc F. Plattner (eds.) (1996) *The Global Resurgence of Democracy*, 2nd ed., Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Diamond, Larry and Marc F. Plattner (eds.) (2006) *Electoral Systems and Democracy*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Emmerson, Donald K. (2012) 'Minding the Gap Between Democracy and Governance,' *Journal of Democracy*, Vol. 23, No. 2, pp. 62-73.
- Emerson, Peter (2011) *Defining Democracy: Voting Procedures in Decision-Making, Elections and Governance*, 2nd ed., London: Springer.
- Fish, M. Steven and Jason Wittenberg (2009) 'Failed Democratization,' in Christian W. Haerpfer, Patrick Bernhagen, Ronald F. Inglehart and Christian Welzel (eds.), *Democratization*, Oxford: Oxford University Press, pp. 249-265.
- Haerpfer, Christian, Patrick Bernhagen, Ronald F. Inglehart and Christian Welzel (2009) *Democratization*, New York: Oxford University Press.
- Held, David (2006) *Models of Democracy*, 3rd ed., Cambridge: Polity Press.
- Hale, Henry E. (2011) 'Hybrid Regimes: When Democracy and Autocracy Mix,' in Nathan J. Brown (ed.), *The Dynamics of Democratization: Dictatorship, Development, and Diffusion*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 23-45.

- Huntington, Samuel P. (1991) *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century*, Norman: University of Oklahoma Press, 1991 (坪郷實・中道寿一・藪野祐三訳 (一九九五) 『第三の波——二〇世紀後半の民主化』三嶺書房).
- Karl, Terry Lynn (1990) 'Dilemmas of Democratization in Latin America,' *Comparative Politics*, Vol. 23, No. 1, pp. 1-21.
- Kjær, Anne Mett (2004) *Governance*, Cambridge: Polity Press.
- Kumar, Krishna (ed.) (1998) *Postconflict Elections, Democratization and International Assistance*, Boulder: Lynne Rienner Publishers.
- Levitsky, Steven and Lucan A. Way (2010) *Competitive Authoritarianism: Hybrid Regimes After the Cold War*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lijphart, Arend (1984) *Democracies: Patterns of Majoritarian and Consensus Government in Twenty-One Countries*, New Haven: Yale University Press.
- Lijphart, Arend (1999) *Patterns of Democracy: Government Forms and Performance in Thirty-Six Countries*, New Haven: Yale University Press (粕谷祐子訳 (二〇〇五) 『民主主義対民主主義——多数決型とコンセンサス型の三六ヶ国比較研究』勁草書房).
- Lijphart, Arend (2007) *Thinking About Democracy: Power Sharing and Majority Rule in Theory and Practice*, London: Routledge.
- Lindberg, Staffan I. (ed.) (2009) *Democratization by Elections: A New Model of Transition*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Linz, Juan J. (1978) *Crisis, Breakdown, and Reequilibration*, Baltimore: Johns Hopkins University Press (内山秀夫訳 (一九八二) 『民主体制の崩壊——危機・崩壊・均衡回復』岩波書店).
- Linz, Juan J., and Alfred Stepan (1996) *Problems of Democratic Transition and Consolidation: Southern Europe, South America, and Post-Communist Europe*, Baltimore: Johns Hopkins University Press (荒井祐介・五十嵐誠一・上田太郎訳 (二〇〇五) 『民主化の理論——民主主義への移行と定着の課題』一藝社).

- Lipset, Seymour M. (1959) *Political Man: The Social Bases of Politics*, Doubleday (内山秀夫訳 (一九六三) 『政治のなかの人間——ポリティカル・マン』東京創元新社).
- O'Donnell, Guillermo (1973) *Modernization and Bureaucratic-Authoritarianism: Studies in South American Politics*, California: University of California Press.
- O'Donnell, Guillermo and Philippe C. Schmitter (1986) *Transitions from Authoritarian Rule: Tentative Conclusions about Uncertain Democracies*, Baltimore: Johns Hopkins University Press (真柄秀子・井戸正伸訳 (一九八六) 『民主化の比較政治学——権威主義支配以後の政治世界』未来社).
- Pierre, Jon (ed.) (2000) *Debating Governance*, Oxford: Oxford University Press.
- Puddington, Arch (2012) 'The Year of the Arab Uprisings,' *Journal of Democracy*, Vol. 23, No. 2, 2012, pp. 74-88.
- Schumpeter, Joseph A. (1942) *Capitalism, Socialism, and Democracy*, New York: Harper and Row (中山伊知郎・東畑精一訳 (一九六二) 『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社).
- Snyder, Jack (2000) *From Voting to Violence: Democratization and Nationalist Conflict*, New York: W. W. Norton & Company.
- Sørensen, Georg (2008) *Democracy and Democratization: Processes and Prospects in a Changing World*, Third Edition, Boulder: Westview Press.
- Stepan, Alfred (2009) 'Introduction: Undertheorized Political Problems in the Founding Democratization Literature,' in Alfred Stepan (ed.), *Democracies in Danger*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp. 1-14.
- Tilly, Charles (2007) *Democracy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Vanhanen, Tatu (1990) *The Process of Democratization: A Comparative Study of 147 States, 1980-88*, New York: Crane Russak.
- Weiner, Myron and Ergun Özbudun (eds.) (1987) *Competitive Elections in Developing Countries*, Durham: Duke University Press.
- Whitehead, Laurence (2002) *Democratization: Theory and Experience*, New York: Oxford University Press.

△和書▽

岩崎正洋（二〇〇六）『政治発展と民主化の比較政治学』東海大学出版会。

岩崎正洋（二〇〇七）「民主主義と国家」岩崎正洋・坪内淳編『国家の現在』芦書房、九―四一頁。

岩崎正洋編（二〇一一）『ガバナンス論の現在——国家をめぐる公共性と民主主義』勁草書房。

岩崎正洋（二〇一二）「民主化の成功と失敗——民主的ガバナンスを考えるために」秋山和宏・岩崎正洋編『国家をめぐるガバナンス論の現在』勁草書房、一五五―一七七頁。

木村宏恒・近藤久洋・金丸裕志編（二〇一一）『開発政治学入門——途上国開発戦略におけるガバナンス』勁草書房。

曾根泰教（一九八四）「J・A・シュンペーターと現代民主主義——古典的民主主義批判と『いまひとつの民主主義理論』の提唱」白鳥令・曾根泰教編『現代世界の民主主義理論』新評論、九―三三頁。

曾根泰教（二〇一一）「ガバナンス論——新展開の方向性」岩崎正洋編『ガバナンス論の現在——国家をめぐる公共性と民主主義』勁草書房、一九―三三頁。

日本比較政治学会編（二〇一二）『日本比較政治学会年報第一四号 現代民主主義の再検討』ミネルヴァ書房。

西岡晋（二〇〇六）「パブリック・ガバナンス論の系譜」岩崎正洋・田中信弘編『公私領域のガバナンス』東海大学出版会、一―三二頁。

付記 本稿は、二〇一二年度日本政治学会研究大会（二〇一二一年一〇月六日に九州大学で開催）の分科会「民主化後の民主主義定着に関する再検討」に提出した報告論文「民主化とガバナンス」をもとにしたものである。

